『大法輪』 第62巻（平成7年）第10号 1995.10.1発行
1995-47-①/5 大法輪閣 pp.34-35

にも読みにくい字も困るが、字面から書いた人がどんな人だろうと想像する楽しみも捨てがたいものがある。そんなふうに思っていたところ、先日ワープロにも個性が出るのだと思わされる出来事があった。

今、福岡で発行されている『西日本新聞』に毎週「西日本戦後写真史」というコラムを連載している。九州出身、あるいは九州に関わりのある写真家たちの作品と時代背景を論じているのだが、その担当のTさんからのワープロのファックスが面白い。文章自体がとても短く、せいぜい二行か三行である。それでも伝えたいことが簡潔に、要領よく書いてある。普通なら電話ですむことだが、なぜかファックスで送られてくる。逆にわずらわしい応対をする必要がないので、こちらも気が楽である。

Tさんのワープロには彼の個性がにじみ出ている。これからは手書きとワープロをことさらに区別する必要もなくなるかもしれない。

オウムにも三分の理

橋爪大三郎（はしづめだいさぶろう）
（社会学者・東京工業大学教授）

オウム真理教は、仏教を名のっているくせにハルマゲドンを持ち出すなど、キリスト教の要素も混じっている。こういう奇妙な教義に、仏教界はぜひ論争を挑んでほしい。

麻原彰晃氏はオウム神仙の会を旗揚げする前、阿含宗に加わっていたという。パーリ語原典に依拠するオウムのスタイルは、そこから取り入れたものだろう。そのさらに元をたどるとキリスト教のファンダメンタリズムに行きつくと、私は推測する。南伝パーリ語の阿含経にこそ仏陀の真説が語られているという発想は、死海文書の発見に衝撃を受けた聖書学や、逐条霊感主義に通じるものがある。

パーリ語仏典に依拠すれば、北伝の漢訳仏典に拠ってきた日本の諸宗派と、正面からぶつからないですむ。大乗や密教の教理も、インド（ヒマラヤ？）で修行した麻原氏が体得して帰ってきたことになっている。麻原氏はこれまでの日本仏教の蓄積と別なルートで、仏陀につながっているという仕組みだ。

それ以上に日本の諸宗派は、オウム真理教を批判したくてもできない事情がある。

日本の諸宗教は、華厳宗にせよ、天台宗にせよ、そこから分かれた日蓮宗や浄土宗にせよ、教相判釈をもとに分岐してきた。教判は中国独特のもので、しかも大乗仏説を前提とする。いっぽう仏教学は、インドにおける仏典の歴史的展開を学問的に実証する（したがって、大乗非仏説を当然とする）から、本来なら、諸宗派を解体してしまうはずだった。だが、そうはならなかった。日本仏教は、日本人の儀式（特に葬儀）をとり行なうという社会的機能を果たしているので、解体するわけにいかなかったのである。

だがこの結果、仏教は、現代にふさわしく再生するチャンスをみすみす失った。日本人は精神に大きな空白を抱えたまま、近代社会を生きることになった。オウム真理教の事件は、どれほど大きな空白をわれわれが抱えているかを、改めて示すものなのである。

『NEWS WEEK』1995.11.22号
TBSブリタニカ おまけ

APEC

アジアの中の日本

欧米からアジアへ、日本のカネとヒトの流れが大移動を始めている
「脱欧入亜」を唱える声も聞こえてきた。だが日本がアジアに本当に溶け込むには、あまりに課題が多すぎる

日本はアジアに興味などもたない」と、韓国・中央日報の金永熙（キム・ヨンヒ）は言う。「欧米経済が持ち直せば、日本はいつでも『脱アジア化』する。彼らにとっては、カネがすべてだ」

東京工業大学の橋爪大三郎教授（社会学）も同意見だ。「日本はアジアという言葉を、欧米と接触して初めて知った。アジアの一部と見られるのは不本意で、欧米列強の一部になりたかったのだ」

アジアに対する日本の近視眼的対応は、さまざまな分野にツケをもたらしている。たとえば——。

（1995年11月22日発行）

1995-47-②/5

『ゴーマニズムとは何か－小林よしのり論』　PP.144-146　出帆新社 95.2.16

快調・ゴーマニズム宣言

橋爪大三郎

漫画家小林よしのり氏の「ゴーマニズム宣言」（「週刊SPA！」連載）が快調である。十一月十一日、十七日号では二回にわたって、部落差別の問題を取り上げている。

タブーとされてきた社会問題に正面から切りこむ。しかも作者みずから漫画に登場し、原稿がボツになったいきさつなんかも同時進行で描いてしまう。このあたりが人気の秘密だ。今回も、解放同盟の小森書記長と実際に対談した実況中継である。

小林氏が優れているのは、差別語狩りが差別解消につながらないばかばかしさを指摘したばかりか、その先も考えたこと。「被差別者は闘う根拠と宿命をもつエリート」である。だから、スターや歌手や有名人が集まって「ザ・部落ウルトラ解放フェスティバル」を開き「部落の出だからオレは才能がある」と宣言してもらう。そうやって価値観を逆転させることが、差別を克服する決め手になる。――考え方としてはまことに正しく、敬服するほかない。

ひと昔前なら「ダサイ」と一蹴されていたかもしれないこうした健康なラディカリズムが復権したことは喜ばしい。ところで気になるそのパワーは、漫画だからこそのものなのだろうか。

漫画はたしかに全感覚的なメディアである。そこにはセリフも表情も、罵声もしたたる汗もある。差別をめぐる現状への怒りを、小林氏はこぼさず盛り込むことに成功している。そのことをうらやましく思う。

活字には活字のラディカリズムがありえよう。それは、活字のみを介するというルールに従いながらも、全感覚的な存在である人間から人間への太いメッセージを伝えるはずだ。

しかし現実には、活字からちょろちょろと貧弱な細流しか伝わってこない仕事ばかりに見えるのはどうしてか。毎月雑誌のページを繰りながら、自分のことも反省されて考えてしまうのである。

（「毎日新聞」九三年十一月二十二日付夕刊より）

「ゴーマニズム宣言」第4巻より

日本経済新聞
SUNDAY NIKKEI
1995年（平成7年）2月26日（日曜日）　おまけ

電脳福祉論

森岡　正博著

情報技術が生む問題点探る

生命学、哲学の気鋭の論客による対談集。宗教学の鎌田東二、社会学の橋爪大三郎、科学史の米本昌平ら五人と、情報技術時代における人間の福祉の問題を語り合う。話題はパソコンゲームから生命倫理、バーチャル・リアリティーと幅広い。

タイトルといい、「サイボーグ化する老人」といった本書で飛び交う概念といい、思考実験、悪くいえば思考のお遊びのような印象すら与えかねないが、それはすでに現実となっている現象の言い換えに過ぎない。

たとえば病院のICUなどで、延命装置に接続された患者を想起してみる。装置無しでは生存しえない彼にとって、機械、ひいては無菌室に代表される病室そのものすら彼の身体の一部ではないか。これが森岡の立論であり、彼はそれを「サイボーグ化」と呼ぶ。

あるいは寝たきりの老人が、パソコン通信で遠隔地との交流が可能になったとすれば、彼の身体がそこまで拡大したと考えられる。バーチャル・リアリティーの技術が進めば「もう一度野原を走り回りたい」という彼の願いを、バーチャル世界でかなえることすらできるだろう。かように現代社会において、福祉と「電脳メディア」を切り離して考えることはできないというのが森岡の主張だ。

もちろん明るい未来図だけでなく、必然的に派生するであろう生命倫理の問題や、人間と機械の共生のあり方といった難問が本書のもうひとつの話題でもある。「こうすればいい」式の安易な回答は提示されていないが、先端的な知性が現代の輪郭を描き、問題の所在を明らかにするプロセスには、対談集という視みやすい体裁ながら「共同研究」ともいえそうな深さがある。（学苑社・一、五〇〇円）

1995-47-③/5

高度資本主義下の（テレビ）『情況としての画像』吉本隆明著

河出文庫　pp. 198－201

解説

橋爪大三郎

吉本隆明氏が、本書のもとになる原稿を『TBS調査情報』のために執筆・連載したのは、一九八七年から八九年にかけての約二年間。冷戦の崩壊、湾岸戦争の勃発とともにバブル景気がくずおれて、日本経済が不透明な九〇年代を迷走し始めるその直前のことだった。当時のテレビの華やぎぶりが、吉本氏の筆致を通じて伝わってくる。

テレビは本来、批評の対象にならないものだった。

テレビドラマやドキュメンタリー、コマーシャルなど、一個の作品という体裁をとれば別である。けれども、『マス・イメージ論』『ハイ・イメージ論』によって、漫画、ニューミュージック、都市環境など、メディア文化の現状理解に独自の思想的課題を見出した吉本氏は、作品ではなく、テレビメディアそのものを批評する必然を手にしたのだった。氏ならではの縦横のテレビ批評を、楽しむことができるのが本書だ。

氏はテレビメディアの現況診断を、冒頭の「テレビはどこへゆくか」でさっそく、精確このうえなしに下している。〈ワイドなニュースやドキュメンタリーの番組は……ドラマに限りなく接近してきている。一方……テレビドラマのたぐいは……限りなくワイドなニュースやドキ

ュメンタリー番組に近づいていっている。〉要するに、シリアスな報道番組でも芸術の香り高いドラマでもない中間の場所、虚実のあわいにたゆたうバラエティーこそが、高度資本主義時代のテレビの純粋形態なのだという診断だ。

＊

バラエティーとは、〝テレビ局で面白いことが起こる〟というコンセプトに要約される。

私の数少ないテレビ出演の経験からすると、テレビほどいい加減なものはない。まず、台本がない。（いちおうあるけれども、〈ここで○○さんの話（適当にお願いします、10分間）〉なんて書いてあったりする。）つぎに、責任者がいない。（プロデューサーがいるわけだが、ディレクターをいい加減に指図しながら、録画撮りを調整室で見ているだけである。）打ち合わせもない。タレントと称する人びとは、観客もいないのにやたらテンション高く、つぎからつぎへとどうでもいいことを延々と喋り続ける変人・奇人たちである。テレビの唯一・最大のタブーは、誰も何も喋らない沈黙なのだが、そのタブーを回避するよう特化した存在がテレビ・タレントにほかならない。要するに、テレビとは、テレビカメラとテレビ塔、テレビ受信機などから成り立つ機械システムなのであって、スタジオからだらだらと画像を映し出すことが（技術的に）できる。その画像をなるべく多くの視聴者に視てもらいたいという願望だけから、すべてが出発しているのだ。

テレビは開局した当初、ラジオ、映画、演劇などこれまでの娯楽形態との連想にひきずられて、テレビの本質とほど遠いところから番組づくりを始めた。それが、高度資本主義の成熟を

迎えた八〇年代の末までに、試行錯誤のすえ、テレビ的なるもののひとつの完成にいたる。その様相を、吉本氏はよく書きとめている。タモリ、たけし、さんま、とんねるずといった固有名たちが、テレビ的なるもののどういった個性的な具体像を結んだかについて、本書の各章から存分に味わってもらいたい。

＊

テレビは過去を忘却しつつ、日々変化していくものなので、本書が書きとめている当時のあり様と、いま現在のテレビのあり様とは、少々のずれがある。もう打ち切られた番組もかなりあるし、新しいタレントも取り上げられていない。

これは、テレビという生き物を批評する以上、やむをえないことだと言える。テレビの側には批評されるつもりなどまるでなくて、ただ毎日の放送、つぎのクールの新番組がどうのこうのと、右往左往しているだけだ。もしもいまのテレビを批評したければ、吉本氏のやり方の真似をして、読者がめいめいやってみればよいのである。

そういうずれと別に、私は、もうこういったテレビ的なるもののピークは過ぎており、高度資本主義との蜜月は二度と戻ってこないだろうということを感じた。

それは私が最近、ケーブルテレビを視ていることと関係がある。ケーブルテレビは、地上局と違って、放送衛星や通信衛星を経由したチャンネルを、一度に何十と流すことができる。一日中スポーツを観戦していてもいいし、CNNをつけっ放しにしていてもいい。視聴者の嗜好にあわせて、その数だけのチャンネルがある。たかだか五つか六つの地上局が、視聴率20％を

競って番組をぶつけあうのとまったく違った力学が、支配するのだ。そこでは、せいぜい視聴率数％にあたる人びとがターゲットになっている。ケーブルテレビだと、テレビ・タレントもいらなくなる。いつも番組に出ている人間の、顔と名前は覚えるが、要するにそれだけのこと。「視聴率がとれる国民的キャラクター」としてのタレントは、ケーブルテレビに似合わないのだ。

九〇年代以降の高度資本主義は、ケーブルテレビからマルチメディアへの道を歩んでいる。そういう情況の批評が、本書のスタンスを受け継ぐ仕事になるはずだ。

＊

最後に、吉本隆明氏の著作の文庫解説を担当するという、光栄ある機会を与えられたことを感謝したい。

（1995. 8. 20）

朝日新聞

読書　12版　1995年10月8日

大問題！

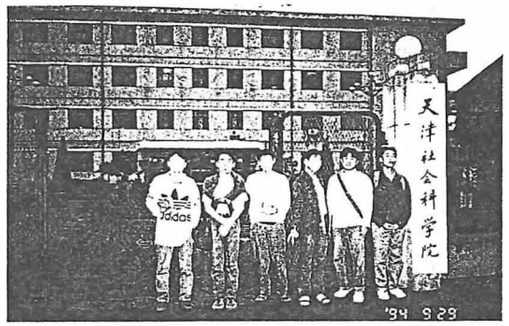
橋爪大三郎著

「オウム事件」から始まって、阪神大震災、不況、連立政権など、政治、経済、文化を縦断しながら、「社会」はいかにあるべきか、また、いかにあるべきかを、語る。市民が社会をつくる主体であるべきであり、社会科学とはそのためのツールであると考える著者による現代社会の絵解き。「ゴーマニズム宣言」の小林よしのり氏との対談も収録。

（幻冬舎・一、四〇〇円）

中国研修旅行・報告記

橋爪大三郎



東工大の学生６名を引率して，９月23日から10月３日にかけて，中国の天津・北京・上海を回ってきました。正直くたびれましたが，きわめて大きな教育効果のあることも実感できました。これからも新設の「総合科目Ｂ」などのかたちで，毎年続けて行なう価値があると思います。

一行の内訳は，一年生３名，二年生２名，三年生１名。一年生の３名は，私の担当する総合講義Ａ２組「シンクタンク94」を受講し，「中国経済」をテーマに選んだグループのメンバーです。調査のため中国に行きたいと言うので，私もこの機会に上海の浦東開発区を見学したいと思い，連れていくと約束しました。３人だけでは人数が少ないので，学内にポスターを貼りだして，同行者を募集しました。夏休みで時期が悪かったのと，予算20万円が少し高かったらしいのとで，目標の10人には足りませんでしたが，結局総勢６名。パスポートやビザの取り方から手ほどきし，事前に説明会も開きました。

受け入れ先は天津社会科学院。院長の王輝先生は社会学者で，昨年10月には本学を訪れて記念講演もされており，私とは旧知の間柄です。こちらの希望に応じて，宿舎や車の予約，国内航空券の購入から，学生のための講義，通訳・付添いの手配にいたるまで万全の準備をしていただきました。たとえば天津の宿舎・山西賓館は，セカンド・ルームもついた豪華な部屋でしたが，市内で一番安くて一泊1500円位です。食事はセルフサーヴィスにしたので，一日200円位でした。おかげで旅行の総額は，往復の航空券も入れて，約14万５千円に収まりました。

日程は以下のようです。

９月23日　成田→北京→天津
９月24日　午前：社会科学院で歴史の講義
　　午後：絨毯工場，天津テレビ塔見学
９月25日　天津ニ北京：故宮，中関村見学
９月26日　天津郊外・郷鎮企業，農家見学
９月27日　社会科学院で経済，社会の講義
９月28日　天津経済技術開発区見学
９月29日　午前：天津郊外・楊柳青旧家見学
　　午後：南開大学の大学生と交流
９月30日　天津→北京→上海
10月１日　上海浦東新区・旧市街見学
10月２日　玉仏寺，商業再開発地区見学
10月３日　上海→成田

学生諸君の中国語はカタコトのため，一般市民の皆さんと自由に交流するのは困難でしたが，それでも隣国・中国の経済発展の様子や，文化・社会的背景，市民生活のあり様などに関して，有形・無形の知識を吸収したように思います。今回の経験を踏まえて後日きちんとしたレポートを提出すれば，人文社会科学講義の単位を認めることとしました。

王輝院長はわれわれ一行のため，特に一夜の宴を設けてくださり，めいめい記念の品まで頂戴しました。東工大のため，今後も協力を惜しまないとのお言葉も有り難く，帰国した次第です。

（工学部一般教育等　社会学　助教授）

『エネルギーフォーラム』電力新報社　第４１巻第４８７号（９５年７月号）ｐｐ．１１

1995-47-④/5

Opinion

夏休みを三カ月に

橋爪大三郎
東京工業大学社会学教授

地下鉄サリン事件がオウム真理教の組織的な犯行だったことが明らかになるにつれ、日本社会の病理がここまで深まっていたのかという驚きが人々をとらえている。

三十歳前後かそれ以下の人々に潜在的なオウム予備軍は多い。UFOに興味をもち、オカルトや超常現象を信じ、自己啓発セミナーに魅かれる。民主主義、科学、信教の自由など戦後日本の価値観が裏目に出た。どこか根本的なところで、社会を支える行動様式や価値観が空回りしていたのだ。

この危機は、つきつめて言うなら教育の失敗にあると私は思う。

戦後教育がしばらくのあいだうまくいったようにみえたのは、農村→都会、勤勉→所得上昇といった可能性を学校教育サービスの量的拡大が後押ししたからだった。教育はよりよい人生を送るためにプラスになった。しかし高校進学が当たり前になり、大学進学率が頭打ちになり、それは逆転する。教育は人々によりよい人生のチャンスを提供するものであることをやめ、競争を通じて大部分の人々からチャンスを奪い取るものに変質した。学校教育は空洞化し、当然、校内暴力が続発、それが収まると今度はイジメが横行した。

戦後教育の最大の欠点は、受験能力に代表される学力を評価する尺度は持っていたが、宗教・哲学に代表される価値教育を公教育の場から追放してしまったことだ。学力一元観は学力＝人間の価値という誤解をうみ、ニヒリズムを増幅した。学力が劣ると判定された生徒たちは、全人格を否定されたのと同じことになる。これで暴れなければどうかしているだろう。

追い詰められた若者たちの行き先はメディアの与える仮想現実の世界である。非現実的なオカルトに彼らが魅かれるのは、社会の現状に彼らが憎しみを抱いていることの裏返しである。M君事件のあと、我々は手を打つべきだったが時間を空費し、オウム・サリン事件を迎えた。ニヒリズムのエネルギーを根本から断たねばだめだ。

そこで結論だが、夏休みを三カ月にしよう。突飛なようだが、子供を自然のただ中に放りだすためだ。家族ぐるみ農村の一軒家で暮らすもよし、海外のキャンプで数カ月を過ごさせるもよし。もちろん企業も夏休みを長くする。大学は入学試験をなくし、公教育を自由化する。親も受験で子供の頭がよくなるなどという錯覚を捨てよう。夏休みを三カ月にしないと日本は滅びる、と私は言いたい。

1995-47-⑤/5

『怨念の日本文化』―〈幽霊篇〉・〈妖怪篇〉のまとめとして、角川書店から『日本妖怪地図』。『漱石邸幻想』・『魯迅居断想』につづく『子規庵追想』を創樹社から、これで《わが随想三部作》が完成します。

ほかに、長い間暖めて来た『日本近代民俗文学論』、歌集『北京烈日』と『源氏物語を詠む』を上梓します。

金城清子
◎社会学

本年は、そろそろ日本でも本格的な問題になると考えられる生殖技術について『生殖革命と人権』（中公新書、二月刊行予定）にひきつづき、医学だけでなく倫理、法律などばばひろい、そして女性の視点から執筆したい。手はじめとして『脳の法令』で、この問題について月一回の連載をはじめる予定である。

嶋岡　晨
◎詩・評論

春、白地社から昭和の詩論史を中心にした本（たぶん『《詩》と《非詩》のはざま』といったタイトルになる）を刊行する。

他に新詩集、文学的随考集なども企んでいるが、さて……。

橋爪大三郎
◎社会学

昨年は予定外の本を数冊出すことが出来たが、今年はそうも行くまい。まず、宝島社からの合集に連載していた論文の続きを書き終えて、一冊にまとめるのが先決。岩波・現代社会学の依頼原稿もまだ書いていない。

宗教社会学の講義録、これまでの対談を集めたものも、計画が進んでいるが詳細は未定。科学技術フォーラムの企画（研究オープン化がテーマ）も、去年の地球環境問題のような体裁の本にしたい。中国語の本の翻訳も一冊する予定。

東工大大学院新専攻（VALDES）が四月にスタートする予定なので忙しくなるが、それでも余力があれば、懸案の執筆を順に進めていく。

宮崎繁樹
◎国際法

著書
○『新コンメンタール・国際人権規約』共著（日本評論社）
○『明治大学が亡命した日』（自費出版・予定）
○『現代の人権と同和問題』共著（明石書店）

論文
○「人権規約の意義と役割」
○「国際人権（自由権）規約の留保」
○「国際的視点からみた日本人の人権意識」
○「日本の人権政策への提言」（『現代世界と人権』所収）
○「世界の人権と部落問題」

志賀信夫
◎テレビ論・映像論

次の三著を執筆するための準備に入っております。
1、『ビデオジャーナリストの時代』――テレビ変革の旗手の誕生と行動。
2、『マルチメディアを創るパイオニアたち』
3、『年間TVベスト作品第一九集』の作品選定。

保昌正夫
◎文芸評論

浅見淵『昭和文壇側面史』（一九六八年刊）が文芸文庫（講談社）に加わることになったので同学の西野浩子の協力を得て浅見淵年譜、著書目録等をあらためて作ってみました。浅見さんについての小さな本を編んでみたく考えています。

坂口義弘
◎ルポルタージュ

『通信販売の実態』『ヤマハの凋落』ともに九五年、単行本依頼があったにもかかわらず九六年に持ち越し。もっとも出版社が延期でもいいとOKしてくれればの話。ナマが欲しかったのに乾したものは要らないと言われればおじゃん。

なにしろ月刊誌の連載で月に一〇誌ほど書くといった〝日ゼニ〟稼ぎ、男はつらいよの心境。

「マルチメディア」「シェア」「易（えき）」「世襲経営の研究」などをまとめたい。

御厨　貴
◎日本政治外交史

昨年度から今年度をへて来年度にかけてブックフォームになる予定のものを多数かかえている。確実なものだけを、とりあえずあげる。
①『政策の総合と権力』（東京大学出版会）
②『東京』（読売新聞社）

すべてが順調にいけば、今年度後半にあと二冊が具体化するであろう。

野島秀勝
◎文芸評論

一月中旬に今年九一歳になるアメリカの女流文芸評論家ダイアナ・トリリングの『旅のはじめに――ニューヨーク

日本経済新聞　おまけ　1995年（平成7年）11月19日（日曜日）
SUNDAY NIKKEI

ウエーブ

『社会学の時代』再来

平易に現代を読み解く

現代社会に対する不透明感が強まる中、社会を読み解く学問としての期待を受けて社会学が勢いづいている。最近の特徴は一般読者に語りかけるような平易な書きぶり。あらゆる社会現象を研究対象とするだけに、新しい分野の開拓も成果をあげつつある。社会現象を分析するだけでなく、具体的に新しい行動指針を示す「行動する社会学」の試みも目立つ。混とんとした時代の要請を背景に、社会学の時代が再び到来したようだ。

□　□

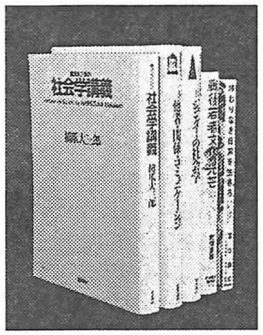
「社会学」を『広辞苑』で引くと、「人間の社会的共同生活の構造や機能について研究する学問」とある。辞書的定義とはこういうものだろうが、抽象的でわかりづらい。橋爪大三郎東京工業大学教授の『橋爪大三郎の社会学講義』（夏目書房）も「『社会学』は、つかみどころのない学問だという声を、よく耳にする」と始まる。著者は、一貫して分かりやすい言葉で社会学的なものの見方の重要性を問い掛けてきた社会学者だ。

「社会学講義」と題されているものの、同書は教科書的な社会学の入門書ではない。各章の見出しからも著者の問題意識は読み取れる。「オウム真理教はいかに、陰謀集団に変質したか」は、「法や制度の設計思想にまたれながらも、明解な答えを用意しにくい種類のこうした問題に、著者は基礎から順序立てて問題の答えを導いていく。

著者が本書で目指したのは、「日本語でどこまで社会学ができるか。人びとが日頃抱いている社会についての共通了解を土台にして、社会の構想をなるべく上の方まで積み上げていくこと」。「日本の諸制度は制度疲労を起こしている」と見る著者は、「政教分離について」「日本の政治権力はどのように作動するのか」「資本主義再入門」。現在の日本において広く関心を持たれている仏語「sociologie」は十九世紀半ばに仏社会学者オーギュスト・コントが造り出した言葉だ。以来、約百年間、社会学にはジンメル、デュルケーム、ウエーバーらの巨人が登場し、その研究領域は広がり続けた。しかし、「その後、社会学は志が低くなった」（『橋爪大三郎の社会学講義』）。社会現象に追随したり、新奇さを狙ったりする社会学者が現れ、日本の社会学は混迷の時期を迎えた。

□　□

一方、独自の視点から新たな研究領域を開拓し続けてきた社会学者もいる。こうした研究者の仕事を通して最先端の社会問題を網羅しようと、岩波書店は十一月、シリーズ『岩波講座現代社会学』（全二十六巻、別巻一）を刊行した。二百人以上の執筆者を起用して四半世紀の社会学の成果を総まとめした、



で立ち返って、新たな設計思想を提示するのも社会学者の役割」という。社会の見取り図にとどまらず、次代への行動原理を示す意気込みがうかがえる。

日本では「社会学」と訳されて〜〜〜〜〜社会現象に新たな視点を提示する

編集委員は刊行の狙いを「冷戦構造の終焉。高度情報消費社会の展開。他方で深刻化する貧困と飢餓。地球環境と資源の危機など（中略）この変動の時代に、人間社会の現象を総体として根底から把握すると同時に、現実の課題と真正面から立ち向

相互に無関係とも思える分野が並ぶ。各巻とも、各問題に沿って多角的に現代社会の実相を照らし出す意欲的な論文十編前後を集めている。

編集委員は刊行の狙いを「冷戦構造の終焉。高度情報消費社会の展開。他方で深刻化する貧困と飢餓。地球環境と資源の危機など（中略）この変動の時代に、人間社会の現象を総体として根底から把握すると同時に、現実の課題と真正面から立ち向かおうとする社会学の初心ともいうべきものが、今日再び切実な時代の課題と呼応するものとなってきています」（同講座「編集にあたって」）と、現実に引き付けて説明している。

社会的事件に対する社会学者の発言も積極的になってきた。宮台真司東京都立大学助教授の『終わりなき日常を生きろ』（筑摩書房）は、オウム真理教の問題を素材に「終わらない日常」に対する不透明性と相対性を抱く現代人の心象風景を指摘。社会学者を連携させて『サブカルチャー神話解体』（パルコ出版）などの研究成果を導いている岩間夏樹ライズコーポレーション社長の『戦後若者文化の光芒』（日本経済新聞社）も、若者文化の軌跡を通史で読み解いた現代社会論として注目される。

□　□

イデオロギー的対立が影をひそめ、価値相対主義が広がった結果、個人が主体的に社会の見取り図を描くことはいっそう難しくなった。その意味から社会学者の活動に寄せる期待は大きく、今後は、現象の解説を超えた具体的な視点の提示をより求められることになりそうだ。

文化部　西村顕治